

令和7年度 第1回子供読書活動推進会議 議事録

日 時：令和7年10月28日(火) 13時00分～14時30分

開催方法：Teamsによるオンライン会議

出席委員：藤倉委員長、宮澤副委員長、小川委員、中村委員、三國委員、恩田委員、
抜井委員、田沼委員、寺嶋委員

欠席委員：新保委員、田中委員、須田委員

1 委員長・副委員長の選出について

委員の互選により下記のとおり選出された。

委員長 県立久喜図書館長 藤倉委員

副委員長 東洋大学准教授 宮澤委員

2 協議

各協議事項について、委員から以下のとおり意見があった。

(1) 「埼玉県子供読書活動推進計画（第5次）」と各課館の取組等について

【田中委員】（事務局代読）

こども基本法が制定され、「こどもまんなか社会」が期待されている。子供の意見を聞き反映するためにアンケートを実施したことが今後の読書活動推進に役立つと考える。調査結果から子供の考えを読み解き、政策に生かしていく会議を本日開催でき、今後の取組に繋がる。嵐山幼稚園では以下の取組を行っている。

1 子供への働きかけ

- ① 毎日の読み聞かせ ②本と触れ合う時間の確保 ③計画的な本の紹介
- ④ 好きな本の発表 ⑤昔話に触れる ⑥外国の絵本の紹介等

2 家庭への働きかけ

- ① ノーテレビ・ノーゲームデーの啓発
- ② 入園説明会や親の学習での読書のすすめの啓発
- ③ 知識の森嵐山町立図書館に行き、一緒に本を選ぶ
図書館に行く日を子供と相談する
- ④ 「親子読書タイム」をする。読んだ本の感想を話し合う
- ⑤ 「我が家の読書コーナー」を親子で相談して設置するよう啓発する

3 地域との連携

- ① 知識の森嵐山町立図書館からの定期的に本を借りる
- ② 年間行事に図書館見学を位置付ける
- ③ 民間企業等からの寄贈図書を活用する

【抜井委員】

小学校の状況として、1冊も読まない子供たちが増えているのは残念である。学校での取組や読書環境について少し紹介したい。子供たちが一番好きな時間は読み聞かせの時間だと思う。保護者の読み聞かせや市の図書館から派遣された学校支援員による読み聞かせの時間は、子供たちの大好きな時間である。子供たちが自分で本を読む時間は、休み時間に図書室へ行って読む時間だが、本校では低学年用と高学年用の図書室がそれぞれ設置されている。また、市から移動図書館も来ている。11月には図書委員会の取組として読書月間という取

組を行っている。本の紹介をしたり、簡単な賞状を授与したりして読書に親しみやすい意欲的な時間を作っていこうと思っている。先ほど、子供たちは読み聞かせの時間が大好きという話をしたが、読み聞かせを行う保護者の人数が減ってきているのが残念なところである。子供たちが本を好きになる、読む機会を作るには大人が声を掛けたり、環境を作ったりすることが大事だと考えている。

【田沼委員】

資料1「3. 施策と取組」の「施策3 学校等における子供の読書活動の推進」について、学校現場の立場からお話させていただきたい。「学校図書館の整備充実・活用促進」と書かれているが、特に「活用促進」が大きな課題だと考えている。本日の埼玉新聞のコラム内で、三郷工業技術高等学校の取組が掲載されていたので紹介したい。同校では、修学旅行の事前学習を学校図書館で行っているとのことだが、その際に、他の人に読ませたい本を短時間で選び、その魅力を伝えるポップを作成する取組を行っていることが紹介されていた。このように、各教科で学校図書館をどう使うのか、子供たちが行きたい・使いたいと思う仕掛けを作ることが大事だと思う。しかしながら実際には、学習用の端末が一人一台配布されており、図書館に行かなくても手軽に調べられるという現状がある。活字の持つ意味を学校がしっかり考えることが重要だと思っている。

【寺嶋委員】

特別支援学校の立場から施策等を見ると、キーワードになるのは「多様性」だと思う。本校には図書室がなく、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下の広いスペースに本棚を設置して、生徒が通るたびに日常的に本に触れられる環境を整えている。二学期になってから、211名の子供たちが本を借りているという状況で、これは去年よりも多い。

また、昨年度も紹介したが、司書教諭と栄養教諭が連携した取組も行っている。絵本に出てくる食べ物を給食に出して、絵本の世界をより理解する取組である。

また、今年の夏休み、日本障害者リハビリテーション協会のセンター長等が本校の司書教諭の取組を見てみたいということで来校した。本協会では、ディスレクシア（文字の読み書きに困難のある学習障害）の人のためのデージー図書の普及活動をしている。本校の司書教諭がこの協会の研修の一環として講演に行き本校の取組を紹介する予定である。

このような形で、本校では様々な取組を行っており、今後も継続していきたいと考えている。

【小川委員】

資料1「3. 施策と取組」の「施策2 地域における子供の読書活動の推進」の「多様な子供たちへの読書機会の提供」について一つの事例を紹介したい。孤立しがちな長期休みに、地元の小学生をコミュニティセンターに3日間集めて、午前中は学習支援と子ども食堂、午後は体験活動として図書館で借りてきた100冊の本を畳に広げ、子供たちが自由に本を読む機会を2時間作った。そこでは、中学生の学習ボランティアの膝の上に乗って本を読んでももらったり、一つの本をみんなで頭を寄せ合って読んだり、一人の読み聞かせボランティアに周りに集まって読み聞かせを聞いたりする子供たちの様子が見られた。地元の小学校が読書活動に力を入れているため、地元で何かできないかという思いから、子供の居場所づくりの中でこの取組を行ったところである。

【中村委員】

ボランティア活動で、学校や幼稚園、子育て支援センター等で読み聞かせなどを行っているが、子供たちに聞くと、先生が紹介してくれた本が一番読みたくなって読むということである。また、保護者に聞くと、SNSで良いといわれている本を選んで子供たちに読んでいる人が多いようである。学校ではぜひ、先生おすすめの本や友達おすすめの本を定期的に紹介

していただけると嬉しい。

我々は読み聞かせをした後、司書に読んだ本の詳細を報告している。学校によっては、関連本と一緒に展示するコーナーを設けてくれているが、それによって更なる本の貸出に繋がると考えている。

資料全般について、元号による表記は分かりにくいので西暦に改めてもらえないか。

【宮澤副委員長】

不読率の割合の増加について見解を述べたいと思う。前提条件として、埼玉県学力・学習状況調査を基にしている。重要なのは、「家ででの生活について、当てはまるものを1つずつ選んでください」ということで、5つの選択肢から回答した結果であることである。これについて、因果関係を述べることはできないが、仮説として2つ提示したい。

1つ目は、全国的に不読者が増加傾向にあるということである。全国SLA（学校図書館協議会）の調査結果¹を見ると、最近になって微増傾向にある。また、埼玉県に限らず、全国学力・学習状況調査における、「読書好意度」もこの10年で下がっていることから、不読率の上昇にも繋がっているというのが1つの仮説である。

2つ目が、スマホ時間と読書時間の逆相関関係の関連性があるという仮説である。先日、ベネッセ教育総合研究所から出たニュースレター²では、ベネッセ教育総合研究所と東京大学の研究所で行われている「子どもの生活と学びに関する親子調査」及び「語彙力・読解力調査」から分析をされたものが示されている。分析結果の2番に着目すると、スマホ使用の影響として、「スマホの使用時間は大幅に増加している」「スマホ時間が長いと読書時間は短くなる」ということが分析から明らかになっている。

アンケート結果を見ても、質問5「自由な時間はどのように過ごすことが好きですか」という質問に対し、「ゲームをする（スマートフォンでのゲームをふくみます）、テレビを見る（Netflixなどの動画配信サイトをふくみます）」と回答割合が最も高かったことが分かる。

また、埼玉県学力・学習状況調査の「テレビゲーム（コンピューターゲーム）をしたり、携帯電話（スマートフォン）を使ったりすることについて、家の人と約束を決めていますか」という質問にも着目すべきだと思っている。ただし、約束に関しては直接的な関係性はないことを補足しておく。

資料1「2.全体目標」の「1か月に1冊も本を読まない児童生徒の割合の減少」について、可能であれば「家ででの生活について」「家で読まない」ということを記載すると、より実態を示す形になるのではないかと考えている。

次に、関係課の「埼玉県子供読書活動推進計画（第五次）」（令和6年度～令和10年度）に係る取組のうち、取組番号6の財務課の取組について質問したい。県立高校の令和6年度の図書購入実績と、令和7年度の図書購入計画が記載されているが、約2,350万円差が開いていることの理由を教えてください。

【落合庁内作業部会委員】

通常、年度の途中で追加措置をしているため計画と実績で差が生じている。令和7年度についても全体の状況を見ながらにはなるが、追加措置をしていく意向である。

【宮澤委員】

高校においても、探究的な学習の時間等で図書館の充実は重要となっているので、気になったところである。例年と変わらず措置してもらえる意向とのことで安心した。

¹ 「学校読書調査」の結果（全国学校図書館協議会）

<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html>

² 「読書をしない」子どもは10年前と比べて1.5倍に増加（ベネッセ教育総合研究所）

<https://benesse.jp/berd/special/datachild/datashu04.html>

（２） 子供の意見を取り入れるためのアンケート結果について

【田中委員】（事務局代読）

子供の意見をどう反映したかを明らかにし、さらに子供から意見を問う等、スパイラルな取組をしていくことが重要だと考える。

【恩田委員】

興味を持ったのは、本を読みたいと思うときに「面白そうな本を見つけた時」とある点である。子供たちがどうやって見つけるのかを考えた時に、学校や学童保育など子供たちが所属している場所の図書コーナーなどで、手に触れる本が非常に重要であると感じた。周りの大人がどういう本を見せるかが非常に重要である。また、今の子供たちはYouTubeなどを見る時間が非常に長いようなので、保護者だけでなく周りの大人たちが、面白い本を薦めるなどして読書環境を整えていく必要があると思う。

子供は、大人から「読書をしなければならない」「読書は必要」と言われると拒否反応が出ると思うが、「この本面白いよ」「こんな感想があるよ」と言われると興味を持つ。子供たちを見てみると、1冊の面白い本をみんなで見ているという場面を目にすることがある。読書は難しい小説を読むことだけが読書ではない。子供と関わる現場で働く人たちは、いかに子供たちが興味のあるものを取りそろえるかということが重要だと考えている。大人も、子供たちがどんなことに興味があるのかを探りながら、本の楽しさを伝えていくべきである。YouTubeやSNSとは異なり、本は自分のペースで読むことができるということを体感してもらうことも重要である。子供は、友達から薦められたものに非常に共感するということもある。また、保護者に本を薦めることによって、親子の間で本の会話ができる環境づくりも重要だと感じた。

【宮澤副委員長】

全体として、こどものこえアンケートを用いた調査をすることで、実際の子供たちの声を集めることができ、それを今後の施策・取組に反映させることができるということは、非常に良い機会になったと思う。特に着目したのは質問4「本を読みたいと思うのはどのようなときですか。」である。最も高い割合のもの、2番目に割合が高いものを中心に、取組を進めることが必要だと考える。ここで強調したいのは、それ以外の子供の声も重視したいということである。小学生から高校生にかけて「何かを知りたいとき、調べていることが正しいかどうかを確かめたいとき」の選択割合が約40%と非常に高いことに着目したい。これは、情報が正しいかを調べたい時に本を使うという探究学習の成果の表れとも言えると考えている。

次に、小学生（高学年）から高校生にかけて「人にすすめられたとき」の選択割合が30%に近いということである。また、小学生（低学年）から小学生（高学年）に着目を見ると「人とはなすきっかけ、話題にしたいとき」の割合が、小学校（低学年）から小学校（高学年）にかけて一気に増加しており、それ以降も10%近くを維持している。これらをひとくくりにして、「人との関係性に関わる項目」としたときに、特に小学生（高学年）から高校生にかけて割合が高くなるということがわかる。先ほど中村委員から、読み聞かせの話が出ていたが、人との関係性が本を読みたいと思うことと関連して重要である。それは子供同士であっても、子供と教員の間であっても、子供と親の間であっても、子供とそれ以外の大人の間であっても重要であるということを読み解いたので、お伝えする。

【小川委員】

質問7の子供たちの回答に感動した。これらのことを子供たちが実現できるように、我々がそれぞれの立場で環境を整えていくことが大切だと思った。

【中村委員】

「本を読みますか」というと、物語をイメージする人が多いため、「図鑑も含む科学の本」と最初に定義することで、図鑑だけ見ている子供もカウントできるのではないかと思った。「マンガをのぞく」とあるが、最近の科学の本は、導入が漫画でそのあとは読み物になっているものが多い。すべての漫画を除くのではなく、例えば、図書館に入っている漫画は含むとしても良いのではないか。また、科学は進歩が著しいため、特に図鑑は最新のもので調べないと正しいとはいえないということを学校関係者や司書に周知していただきたいと思う。

【田沼委員】

中村委員から漫画の話があったが、本校でも人気の高い本は科学漫画や、漫画から小説化した本である。このような子供たちが興味のある本を図書室の入り口に並べ、興味を引くということには注力している。そうすることによって、質問4にあるような面白そうな本を見つける機会として、学校図書館にいざなう工夫が必要だと感じている。

また、24.7%の子供が本を読みたいと思う時に人に薦められたときというのを挙げている。中学校においては、それぞれの教科の特性に応じて、知的な好奇心に訴えるような本紹介を、授業と絡めて結びつけていくことが大事だと思っている。そのためには、職員に対して、本の大切さや読書活動の推進について、管理職がしっかりと伝えていく責任があると感じている。

【抜井委員】

小学校の子供たちも、子供によって興味が本当に様々である。読みたい本をすぐに見つけられる子供と、見つけられない子供と様々である。見つけられない子供には声をかけてあげることが必要である。また、学校図書館支援員がいるので、季節に関わるもの、学校行事に関わるものなど、おすすめの本などを展示している。これらの展示をすることによって子供の興味を引き出している。また、国語の授業では本の紹介も行っており、そのような取組の際には、子供たちも意欲的に本を読んでいる。委員会の取組では、教員のおすすめの本の紹介等も行っている。

【寺嶋委員】

今の子供たちが本と出会うきっかけが、昔と今でどう変わったのかが非常に気になった。本をどこで買ったのか、子供たちが自分で選んで買った本だとしたら、親に大型書店に連れて行ってもらったのか、あるいは近くに本屋があるのか、など子供たちの本との出会いを想像していたところである。社会環境が変わり、本の流通状況や販売状況も変わった中で、子供たちにどんな出会いがあるのかという点が気になった。

【宮澤副委員長】

読書教育の専門家という立場から共有したい点を発言したい。こどものこえアンケートについて、すべて読んだ上で分類をした。こどものこえアンケートと現在の取組をうまく組み合わせながら、計画を実行できればと考えている。このことが子供の立場に立った読書活動の推進につながると考えている。

図書委員・図書係の読み聞かせというものも、小学校高学年や低学年からしっかりと評価されているので、大事にしていくべきだと思っている。

読書を広めるためにどのようにすればよいかという質問に対して、「読書に関するオンラインコミュニティ及び情報共有の場の創出」という趣旨の回答があった。これらは取組番号19や20にも関係するが、長期的に「埼玉県子供読書情報室」等に子供たちが作成した情報の集約や情報共有のページを開設するということも考えても良いのではないかと考えている。

る。

声なき子供を含めたすべての子供のための施策について、未就学児の保護者から切実な声があった。公民館への配本図書の取組は推進されているかと思うが、図書館未設置町への支援となっているため、未設置町に限らず行えるとよいと考えている。

子供たちはとても重要な意見を持っていると感じたのが次の2つである。1つ目が「途中で読むのをやめてもいい」という認識である。これは読書を推進する上で重要なことだと思っている。必ずしも一冊の本をすべて読むのが読書ではないということである。このような認識を子供も大人も持つことが重要である。2つ目が「読書は自分の中では重要だが、おすすめるというのは違うのではないか」という意見である。

そのほか、「読書の時間を必然的に作る」という意見から、朝読書の時間の重要性や、「図書館にコンシェルジュを」という意見から、学校司書の役割の周知の必要性を感じた。このような意見を、取組に生かしていければと思う。

【藤倉委員長】

協議についてはここまでとする。

三國委員から協議後、下記のような意見があった。

【三國委員】

- ・ 県立図書館や市町村図書館、学校図書館において、資料購入費が削減されており、新刊や基本書の買い替えが十分でない現実がある。
古い本が更新されないまま書架に残っていて、児童にとって読書意欲をそぎ、面白い本と出合える場所にならないことが、杞憂される。
(当市の図書館でも、限られた予算の使い方として、貸出の多い未就学児向けの絵本を積極的に購入し、あまり貸出しない中学生向けの海外翻訳児童書の購入を見送るケースがある。)
- ・ 読書に興味がある子(読める子)と興味薄い子が居て、興味薄い子に読みやすい漫画のノベライズ化した小説などの資料を学校図書室に蔵書として配備することも有効と思うが、公共図書館を運営する立場としては、読書に興味がある子に対応できる良書を整備しておくことが必要だと考えている。
県立図書館がおすすめの本のリストを発行しているが、もっと学校図書館などに、「購入すべき資料の目安としてください」と働きかけてよいのではないか。
中学生以上の子供の読書は、成長や未来への不安など内面を支える重要な情報となりうるもの。質の高い読み物や知識の本にアクセスできることは公教育において保障されるべきで、責務を担うべき図書館で良書を備えようとする意識を高く持ってほしいと思った。
- ・ 推進計画に係る取組の報告は、施策に基づいて取組が計画に沿ってすすめられており、また、各委員が属する組織においても本と子供を結びつける取組や、その人材を養成する講座の開催が実施されており良いと思った。
- ・ こどものこえアンケートから読み取れる事項としては、質問5の自由に過ごす時間に高校生でSNSが多いので、インスタなどで高校生に刺さる本の紹介をしていかないといけないと思った。図書館のホームページは見ないのだろう。
- ・ このアンケートは答える意識のある人が答えるタイプのアンケートの結果なので、全体の子供の視点をいかし、読書政策に反映させるのは無理があるように感じた。代替え案がない意見で申し訳ない。